

ハマル語のモダリティに関する試論*

高橋 洋成

(筑波大学)

takahashi.yona.gp@u.tsukuba.ac.jp

1 はじめに

本稿で記述するハマル語は、エチオピア南西部の低地オモ溪谷で使用されているオモ諸語の1つであり、Ethnologueによればおよそ5万人の話者がいる¹。ハマル語の中心的話者であるハマル族の人々は、エチオピアの南部諸民族州 (Southern Nations, Nationalities and People's Region) における南オモ県の県都ジンカから南に約60kmに位置するディメカ、ならびに南に約130kmに位置するトゥルミを中心に生活している。

筆者は2006年から2011年まで現地調査を行い、言語データの収集を行ってきた。本稿はその成果の一部として、ハマル語の動詞形態をムード (モダリティ) の観点から整理し、考察したい。

2 ハマル語文法の概観と問題の所在

2.1 音素目録

本稿では、ハマル語に次の音素を立てる。

p, b, β, m, t, d, d̥, n, k, g, ɡ, ŋ, ʔ; s, z, š[ʃ], č [tʃ], ǰ [dʒ], h; t', č' [tʃ'], q'; r, l, w, j; i, e, a, o, u; iː, eː, aː, oː, uː

*本調査は平成22~25年度科学研究費基盤研究(B)「変容するエチオピア諸言語の静態と動態に関する総合的研究、ならびにデータベース構築」代表：柘植洋一(金沢大学)(課題番号22401046)によるものである。

¹<http://www.ethnologue.com/language/amf>。ただし、このデータはハマル語とバンナ語を一緒に扱っていることに注意されたい。

ハマル語に特徴的な音は入破音 /b, d, g/ と放出音 /t', č', q'/ である。また、閉鎖音 /p, t, k/ は強い有気音であり、ほぼ自由に摩擦音と交替する²。また、/h/ は語頭で有声の [ɦ] になる。

母音は長短を区別する。/e/ は非常に狭く、一方で /i/ はしばしば中央化する。/o, u/ は強い円唇性を持つ。名詞アクセントは語彙的であるが、動詞アクセントは予測可能である場合が多い。本稿では特に注意の必要なものを除き、アクセントを表記しない。

2.2 文法

ハマル語の文法について簡単に説明する³。

名詞には基本形、a-form、no-form、na-form がある。基本形は接尾辞を持たない形であるが (e.g. /q'uli/ 「ヤギ」)、a-form は男性・小さいもの・唯一性などを表し (e.g. /q'ulta/ 「牡ヤギ」)、no-form は女性・大きいもの・集合性を表す (e.g. /q'ultono/ 「牝ヤギ」)。また、na-form は複数性を表す⁴ (e.g. /q'ulla/ 「ヤギ 2、3 頭」)。形容詞も名詞形に一致し a-form、no-form、na-form をとる。

動詞は大まかに perfect-stem、imperfect-stem、descriptive-stem、purposive-stem がある。これらについては後述する。

統語論で重要なのは、名詞と名詞の関係もしくは動詞と名詞の関係を表す後接辞や後接語である。たとえば、dan はいわゆる直接目的語を示し、na は「～に対し」と行為の向かう先を示す。これらは文と文の関係を表すのにも使われ、しばしば従属文をも作る⁵。

²/p/ はほとんどの場合 [f] として実現する。また、本稿では /k/ の摩擦音化したものを k と下線付きで示す。強い有気音としての閉鎖音は、調音的に無気である入破音と対立しており、この点に注意すると両者を聞き分けやすい。

³本稿の例文解釈で用いる記号は次の通りである。A = 名詞の a-form、ACC = 目的語標識の /dan/、COP = コピュラ、DESC = 動詞の descriptive-stem、DONOT = 禁止、GRD = 動名詞、IMPFV = 動詞の imperfect-stem、INF = 不定詞形、INTRANS = 自動詞化接辞、N = 名詞の接尾辞 /n/、NA = 名詞の na-form、NO = 名詞の no-form、NOT = 否定の接辞、PAST = 過去、PFV = 動詞の perfect-stem、PTC = 分詞形、PURP = 動詞の purposive-stem、Q = 疑問接辞、SUBJ = 従属節での形。また、接語の区切りには等号 '=' を用い、形態素ないし意味成分の区切りにはハイフン '-' かピリオド '.' を用いる。ハイフンは原文において形態素境界を明示したとき、その対応する位置に使用する。それ以外の形態素境界にはピリオドを使う。

⁴詳しくは Lydall (1976: 406-409)、高橋 (2010, 2012) を参照。なお、Lydall は no-form の異形態として /-(i)n/ を挙げているが、本稿は /-(i)n/ を no-form とは異なる接尾辞と見なす。

⁵詳細は Lydall (1976: 410-413, 420-427)、高橋 (2010) を参照。

2.3 動詞形態と意味

ハマル語の動詞には過去・現在・未来などのテンスを表す形態法が少ない。行為がいつ行われたものであるかを明示するときは、時を示す副詞を用いるのが一般的である。次に挙げる例は動詞形態が全て同じであり、ただ副詞によってのみ「いつ起きた出来事か」が示されている。

- (1) sa: kisi **na:** kote naʔa ki neʔe.
there he yesterday here come.PFV he come.IMPFV
“He came here yesterday.”

- (2) sa: kisi **ro:ro wul** kote naʔa ki neʔe.
there he day all here come.PFV he come.IMPFV
“He always comes here.”

- (3) sa: kisi **saka** kote naʔa ki neʔe.
there he tomorrow here come.PFV he come.IMPFV
“He will come here tomorrow.”

もっとも、あるテンスを表すのに用いられやすい形態法も存在する。たとえば、次の例における /naʔidi/ 「来た」のように、descriptive-stem の /naʔi-/ に接尾辞 /-di/ の付着した形は行為の完了した状態が続いていることを表す。結果的に、しばしば過去を表すものとして用いられる。

- (1') sa: kisi na: kote **naʔidi** ne
there he yesterday here come.DESC.exist.DESC COP
“He came here yesterday.”

また、先ほど挙げた /naʔa ki neʔe/ 「彼が来る」という複合体は、文脈によっては主観性の強い表現、具体的には可能や願望を表すものにもなる。

- (3') sa: kisi **saka** kote **naʔa** **ki neʔe**.
there he tomorrow here come.PFV he come.IMPFV
“He will (can, wants to) come here tomorrow.”

このようにハマル語の動詞の形態法と、テンス・アスペクト・ムード（モダリティ）とは複雑な対応関係をなしている。それゆえ、ハマル語の動詞の意味論を適切に記述するための枠組みが必要である。

2.4 先行研究

Lydall (1976: 416-418) は、ハマル語の動詞語幹を次のような「アスペクト」
として分類した⁶。なお、以下では動詞を /kumma/ 「食べる」で代表させる。

perfect-stem	/kumma/	“an actual, completed state of action”
descriptive-stem	/kummi/	“a general state of action”
imperfect-stem	/kumme/	“actual, incompleted state of action”
purposive-stem	/kummo/	“an intended state of action”

また、Lydall (1976: 420-424) はこれらの動詞形態が表しうる意味を次のように分類した⁷。/da:/ 「いる、ある」が助動詞的に用いられ、主語要素とともに複
合動詞を構成することに注目されたい⁸。なお、以下では主語要素を /ki/ 「彼、
彼ら」で代表させる。

imperative	/kumma/ (単数) , /kumme/ (複数)
simple present	/kumm(e)/ ⁹ , /ki kumme/
simple past	/kumma/, /ki kumma/
simple present or future continuous	/ki kumme/
present continuous	/kummade/ ¹⁰
future imperfect	/ki da kumme/
present perfect	/kummidi/
past imperfect	/ki kumma de/
past perfect	/ki kumma/
future perfect	/kumma ki da kumme/
future subjunctive	/kummo ki de/
past perfect and present perfect subjunctive	/kummaba/, /kummabe/, /kumma ki be/ /kummota/

⁶原文にはもう1つ、語末母音を持たない immediate stem (/kumm/) がある。しかし、筆者の現在までの調査ではこの動詞形態を確認できないため、本稿では扱わない。なお、Lydall の挙げてある言語データと、筆者の収集した言語データとの相違については高橋 (2009) を参照。

⁷Lydall はこれらを「テンス」と呼ぶなど用語法が曖昧である。

⁸主語要素には接語形と独立形があり、動詞が要請するのは接語形である。接語形には /i(n)/ 「わたしが」、/ja, han/ 「あなたが」、/ki(n)/ 「彼が、彼らが」、/ko(n)/ 「彼女が、あれらが」、/ji(n)/ 「(前述した) それが、それらが」があり、従属節ではしばしば -n あるいはさらに派生した形態が用いられる。一方、独立形には /inta/ 「わたしが」、/ja/ 「あなたが」、/kisi, kidi/ 「彼が、彼らが」、/kosi, kodi/ 「彼女が、あれらが」がある。(前述した) 人・物を表す /ji(n)/ に対応する独立形はない。独立形が構文上必須になることはなく、任意に用いることができる。1つの文の中で、独立形と接語形を同時に用いることも一般的である。

だがハマル語の動詞の形態法において、テンスが二次的であるのは第 2.3 節で指摘した通りである。たとえば、上述の表で “future perfect” に分類されている /kumma ki da kumme/ は、現在継続中の出来事を表したり、可能や意思といった話者の思考を表すのにもよく用いられる。

ハマル語の動詞の形態法は、話者の主観との相関が大きいように思われる。それゆえ、テンスよりもアスペクト、あるいはムード（モダリティ）の観点から分類されるべきものであろう。実際の話法においては /kumma ki da kumme/ が「可能、意思」を表すものとして使われることが多く、ムード（モダリティ）の役割が極めて大きい。しかし、アスペクトについては Lydall の研究に若干ではあるが含まれているのに対し、ムード（モダリティ）については体系的に触れられておらず、命令形・疑問形あるいは助動詞との複合体として扱われているのみである。

こうした現状を踏まえ、本稿はハマル語の動詞の形態法をムード（モダリティ）の観点から整理・分類することを目指す。

2.5 ムード（モダリティ）の分類法

ムード（モダリティ）の分類には、Palmer (2001) をもとに、聖書ヘブライ語の不定詞独立形のモダリティを研究した Callaham (2010: 17-31, esp. 20-21) の枠組みを用いることにする。この枠組みでは、モダリティを大きく命題的 (Propositional) と出来事的 (Event) に分け、それぞれに下位分類を設ける。

- Propositional Modality

- Epistemic

命題の事実状態についての話者の判断を表す。判断の「弱い」順に次のような段階がある。

- * speculative 「自信はないが、……」

- * assumptive 「おそらく、……」

- * deductive 「間違いなく、……」

¹⁰原文では /kumm/ のよう語末母音を持たない immediate stem となっているが、筆者の調査では immediate stem を確認できていない。むしろ simple present は /kumme/ に対応すると考えられるため、本稿では括弧で (e) を追加した。

¹⁰原文では /kumma de/ のように /de/ を独立した語と見なしているが、この場合の /de/ は文法化して語幹と強く結合していると考えられるため、本稿では 1 つの語と見なした。

さらに上の段階として non-modal な直説法 (indicative) を置くこともできる¹¹。

- evidential
命題の事実状態についての話者の根拠を表す。
 - * sensory reported 「～を見た、～だそうだ」
 - negative
命題に関する話者の疑念を表す。「～ではないはずだ」
 - interrogative
命題に対する話者の問いを表す。「本当に～だろうか」
 - future
現在実現していない命題について、話者が未来に行われると想定していることを表す。「～するだろう」
 - conditional
話者が命題に対する条件を提示していることを表す。「～ならば」
 - habitual
話者が特別な条件を伴わない一般的な真実を述べていることを表す¹²。「～するものだ」
- Event Modality
 - deontic
出来事に関する条件的要素が、主体の外からもたらされることを表す。
 - * permissive 「～してよい」
 - * obligative 「～しなければならない」
 - * imperative 「～せよ」
 - * jussive 「～が～するように」
 - * commissive 「必ず～するように」
 - dynamic
出来事に関する条件的要素が、主体の内からもたらされることを表す。

¹¹Callaham (2010: 22)

¹²Habitual は、行為の完了を表す必要がないという点でアスペクトとも相関を持つ。モダリティとしての特徴は、特定の出来事について述べるものではなく、出来事の可能性について述べているということである。Callaham (2010: 28) を参照。

- * abilitive 「～できる」
- * volitive 「～しようとする」
- desiderative
出来事に関する条件的要素が、願いや感情であることを表す。「～したい」
- purposive
出来事に関する条件的要素が、主体の態度や意図であることを表す。「～しようとする」
- resultative
出来事に関する条件的要素が、出来事の完了につながることを表す。「だから～となった」

本稿はパイロット・スタディとして、この枠組みをハマル語に適用してみる。その結果をもとに枠組みを見直し、将来的にハマル語ないしオモ諸語のモダリティの通言語的研究、聖書ヘブライ語をはじめとするセム諸語との比較・対照研究に耐えうるものを構築したい。

なお、通常「ムード」は形態論の範疇を表すもの、「モダリティ」は意味論の範疇を表すものとして使い分けられるが¹³、本稿では以下「モダリティ」で統一する。

3 ハマル語の動詞に見られるモダリティ

3.1 動詞形態とモダリティの一覧

今回検討した例文は 2006 年から 2011 年までの調査で得られたものである。例文の収集方法は、様々な状況について筆者と調査協力者とで簡単なロールプレイを行い、そこで使われたハマル語の文を記録するというものである。また、収集された文を筆者がやや状況を変えて使用し、調査協力者が自然に感じるかどうかを判定した。調査協力者との会話は英語およびハマル語で行われた。

例文から得られた動詞形態とモダリティとの対応関係の一覧を、表 1 と表 2 にまとめた。なお、動詞は /kumma/ 「食べる」で、主語要素は /ki/ 「彼が、彼らが」で代表させる。モダリティを確認できる部分には + 記号を記入している。

以下、表でとり上げた各動詞形態について詳述する。

¹³Callaham (2010: 17)

3.2 単独動詞

3.2.1 kumma

/kumma/ は 1 人の相手に対する命令 (imperative) を表す。また、この動詞形態が通常文で用いられると、1 人の相手に対する義務 (obligative) や指示 (jussive) を表す。丁寧さの度合いについては更なる調査が必要であるものの、この動詞形態はおおむね、どのような相手にも用いることができる。

- (4) ja gon isan=na zagid-anna, isa ta:ki.
 you really eat.INF.N=to want.DESC.exist.DESC-if.you eat.PFV now
 “If you really want to eat, eat now.”
- (5) jera gojte ka maq’ajje, komma dalq’ajse
 thing way this complete.GRD.A.NOT and speak.PTC.IMPFV
mačča.
 finish.PFV
 “This story is not complete, so you have to finish speaking.”

3.2.2 kumme

/kumme/ は /kumma/ と同じように命令 (imperative)、義務 (obligative)、指示 (jussive) を表すが、相手が複数の場合に用いられる。

- (6) ki na?i=na, i desin ina q’ante gije.
 he come.DESC=to I know.DESC.INF.N to me towards tell.IMPFV
 “If he comes, let me know.”
- (7) ta:ki je pimḅidi jennal lej-ha:majse dorq’e.
 now you(pl.) be afraid.DESC you.although lying-do.PTC.IMPFV sit.IMPFV
 “Even if you(pl.) are afraid, you have to stay calm.”

3.3 単独動詞と主語要素の複合体

3.3.1 ki kumma

単独動詞 /kumma/ の前に主語要素を置くと、次に挙げる「どこから来たか」のように、テンスとしての現在完了の意味が生じる。ただし、現在までのところモダリティを確認できない。

- (8) kisi pe: hamora ki na?a.
 he earth from where he come.PFV
 “Which country does he come from?”

3.3.2 ki kumme

/ki kumme/ の用法は幅広い。例 (9) のようにテンスとして現在（特に状態）を表す他、例 (10) のように一般的真実や習慣（habitual）を表すのに用いられる。また、例 (11) のように近い未来（future）の予定を表すときもこの動詞形態が用いられる。

さらに、例 (12) のように願望（desiderative）を表すことも、例 (13) のように願望を抱いた目的（purposive）を表すこともできる。あるいは、例 (13) の /i kelše/ の部分を命令・指示（jussive）と解釈することも可能であろう。

例 (14) は「～しよう、～しよう」の連鎖であり、主語要素の /wo/ 「我々」によって約束（commissive）のモダリティが前面に出ている。例 (15) は可能（abilitive）の意味を包含するものと解釈できる。ただし、例 (15) は否定文のためか主語要素が見つからない。

- (9) isa meten **ko bučče**.
my head.N she have a pain.IMPFV
“I have a headache.”
- (10) pe:no fiajita=ɗan **ko šere**.
earth.NO sun.A=ACC she move around.IMPFV
“The earth moves around the sun.”
- (11) bire ro:ro č’ere=ɗar **i ka:me** fiadar.
before day food(?)=on I meet.IMPFV on you
“I’ll see you before lunch.”
- (12) inta fiambet ga:lin=ɗar **i je?e**.
I with you party.N=on I go.IMPFV
“I want to come with you to the party.”
- (13) kosi iɗan miskidi ne koɗan **i kelše**.
she me.ACC beg.DESC.exist.DESC COP her.ACC I help.IMPFV
“She begged me to help her.”
- (14) birajse wa:ɗima ka **wo mačče**, aga=rra kinka wo kummajsa=ka
first work this we finish.PFV this=from together we eat.PTC.A=by
ja?a.
go.PFV
“First of all, we will finish this work, and then eat together, after that go there.”
- (15) tamari kala q’ole aga=ɗan **aške**.
student one none this=ACC make.IMPFV
“No student couldn’t do that.”

3.3.3 ki da kumme

動詞 /da:/ 「ある、いる」は接語化し、主語要素と動詞との間に挿入され /ki da kumme/ という複合体を形成しうる。この動詞形態は例 (16) のように、常に反復される行為であること (habitual)、もしくは例 (17) のように継続中の状態であることを表す。

- (16) inta ro:ro wul buno **i da** **wuče**.
 I day all coffee I exist.PFV drink.IMPV
 “I always drink coffee.”

- (17) wosi laj-ha:majse kidan **wo da** **q'anse**.
 we lying-do.PTC.IMPV him.ACC we exist=PFV listen.IMPV
 “We were sitting quietly and listened.”

3.4 da 複合動詞

3.4.1 kummida

動詞 /da:/ 「ある、いる」は、接辞化して動詞語幹と一体化することがある¹⁴。こうして形成された /kummida/ は過去に生じた出来事を表す。現在までのところ、この動詞形態のモダリティは明確ではない。

- (18) imba idan gutumin=**ka baʔida** ne.
 father me.ACC shoulder=by carry.DESC.exist.PFV COP
 “My father carried me on his shoulders.”

3.4.2 kummidi

/kummidi/ という動詞形態は行為の完了した状態あるいは結果 (resultative) を表し、しばしば形容詞化する。テンスとしては例 (19) のように専ら過去を表すのに用いられるが、例 (20) のように未来 (future) における完了を表すことも少なくない。

- (19) inta kerin **bulidi** ne.
 I door.N open.DESC.exist.DESC COP
 “I opened the door.”

- (20) inta kojimon innon e:n wul=**na imidi** ne.
 I money.N my.N person.N all=to give.DESC.exist.DESC COP
 “I’ll give my money to whomever wants.”

¹⁴この形態は Lydall (1976) では触れられていない。

3.5 da 複合動詞と主語要素との複合体

3.5.1 ki kummade

/ki kummade/ は、例 (21) のように過去の行為の完了、もしくは例 (22) のように過去の行為に関することが現在まで継続している様子を表す。また、例 (23) のように現在の状態を表すこともある。いずれの例にせよ、アスペクトの意味合いが大きく、モダリティは明確ではない。

- (21) kisi ka kote **ki** da:n **jammarade**.
he this here he already start.PFV.exist.PFV
“Did he already leave here?”
- (22) inta sija **i q’a:bade** kinin lej-ha:majse
I bad I think.PFV.exist.IMPFV he.SUBJ lying-do.PTC.IMPFV
uton=na.
go out.INF.N=to
“I feel strange that they went out of the house silently.”
- (23) koɗan han šeden=ka narsi **ko tahade**.
her.ACC you.SUBJ look.INF.N=by child she appear.PFV.exist.IMPFV
“She is younger than she appears.”

3.6 動詞の複合体

3.6.1 kumma kumma

/kumma kumma/ は、テンスとして過去・現在・未来、アスペクトとして完了相・未完了相、モダリティとして未来 (future)・命令 (imperative)・可能 (abilitive)・意思 (volitive) などを表せる万能形である。この動詞形態はハマル語に固有のものというより、もともとハマル族でない人々が用いることが多いように思われる¹⁵。

- (24) inta buno **wuča** **wuča**.
I coffee drink.PFV drink.PFV
“I was drinking coffee.”
- (25) inta fiadfan **ka:la** **ka:la**.
I you.ACC wait.PFV wait.PFV
“I will wait (or am waiting, can wait) for you.”
- (26) kisi katti **goba** **goba**.
he very run.PFV run.PFV
“He can run fast.”

¹⁵Lydall (1976: 397) は、警察・商人あるいはハマル族でない人々の用いるピジン・ハマル語の存在に触れているが、おそらくこの動詞形態はピジン・ハマル語の一種と考えられる。

3.6.2 kumma kummo

/kumma kummo/ はしばしば相手への依頼を表す。モダリティとしては可能 (abilitive)、意思 (desiderative)、命令 (imperative) に分類されよう。第 3.6.1 節の /kumma kumma/ とは異なり、この動詞形態はハマル族の人々も用いるものである。

(27) **naʔa noʔo ja**
 come.PFV come.PURP you
 “Are you able to come?”

(28) **banzo ja borq’oto sa: aga ina baʔa boʔo.**
 please you chair there that to me carry.PFV carry.PURP
 “Could you bring me that chair, please?”

3.7 動詞の複合体と da 接語形の複合体

3.7.1 kumma da kumma

動詞の複合体の間に、動詞 /da:/ 「ある、いる」の接語形 /da/ が挿入されることがある。/kumma da kumma/ は、現在までの調査によれば過去の出来事を表すのに用いられることが判明している。しかし、そのアスペクトおよびモダリティは明確ではない。

(29) **guʂon hannon taka da taka.**
 finger.N your.N cut.PFV exist.PFV cut.PFV
 “You cut(past) your finger.”

3.7.2 kummo da kumme

/kummo da kumme/ は未来 (future) における可能 (abilitive)、意思 (volitive) を表すことが多い。

(30) **wosi ro:rono q’aji konna, utajse gojin joʔo da jeʔe.**
 we day.NO cold she.if go out.PTC.IMPFV way.N go.PURP exist.PFV
 go.IMPFV
 “If there is a chance in the weather, we can go on a trip.”

3.7.3 kummi di kumme

/kummi di kumme/ は、例 (31) のようにある条件が生じたときにすべきことを表すことが多い (ここでは future、permissive と分類する)。また、例 (32) のように義務 (obligative) を表すこともある。

- (31) i burq'adidi enna, inta akimin o:non **jaʔi**
 I be sick.DESC.exist.DESC I.if I doctor.N house.N go.DESC
di jeʔe.
 exist.DESC go.IMPFV
 “When I am sick, I go to the clinic.”

- (32) isa q'a:bi kala gojti q'ole, komma inta ta:ki **jaʔi di**
 my thought one way none and I now go.DESC exist.DESC
jeʔe.
 go.IMPFV
 “I don't have any choice. I must go now.”

3.8 主語要素と動詞の複合形

3.8.1 kumma ki (da) kumme

動詞の複合体の間に主語要素が挿入されることがある¹⁶。その1つである /kumma ki kumme/ は非常によく使われる動詞形態である。

まず、例 (33) のように習慣的行為 (habitual) を表したり、例 (34) のように近い未来 (future) を表すことが多い。また、例 (35) のような義務的な行為 (obligative)、例 (36) のような可能 (abilitive)、例 (37) のような意思 (volitive)、例 (38) のような願望 (desiderative) を表すのに、一般的にこの動詞形態が用いられる。

- (33) kosi ro:ro wul **šidfa ko šide** o:ni=ra.
 she day all stay.PFV she stay.IMPFV house=from
 “She is always absent from school.”

- (34) kisi kote sa:na **naʔa ki neʔe** fi:ajajse pir sa:na
 he here soon come.PFV he come.IMPFV do.PTC.IMPFV again soon
ke:ma ki ke:me.
 marry.PFV he marry.IMPFV
 “He will come here soon so that he gets married.”

¹⁶後述する /kumman=na ki da:de/ のように、主語要素の後ろの /da:de/ (語型は /kumme/ と同様) が定動詞であり、主語要素の前は動詞の名詞類化したもの、すなわち不定詞形と分析することも可能である。その場合、/kumma ki kumme/ は不定詞形+主語要素+定動詞という複合体となろう。これは聖書ヘブライ語における不定詞独立形の用法と非常によく似ていることを指摘しておきたい。聖書ヘブライ語の不定詞独立形 /kəṭol/ は定動詞 /y-ikṭol/ (/y-/ は3人称男性単数の接頭辞) に隣接し、/kəṭol y-ikṭol/ のような複合体を形成することがある。この用法は伝統的に動詞の意味を強調するものと考えられているが、必ずしも強調とは言えない事例も多く、それゆえ Callahan (2010) はモダリティの観点からの分析を試みた。

- (35) bodo=bette **dalq'inta zaska ki zaske** idan.
 Bodo=with speak.INF.A need.PFV he need.IMPFV me.ACC
 “I have to talk with Bodo.”
- (36) inta bodo=bett **ɗalq'a i da ɗalq'e**.
 I Bodo=with speak.PFV I exist.PFV speak.IMPFV
 “I can talk to Bodo.”
- (37) inta i-miso o:nin-t **woda i da wode**.
 I my-friend house.N-in sleep.PFV I exist.PFV sleep.IMPFV
 “I like to sleep in my friend’s bed.”
- (38) inta buno **wuča i da wuče**.
 I coffee drink I exist.PFV drink.IMPFV
 “I want to drink coffee.”

なお、上記の例 (36)、(37)、(38) のように、/kumma ki da kumme/ のように主語要素の後に /da:/ 「ある、いる」の接語形 /da/ が挿入される場合もある。/da/ の有無による意味の違いは明確でないため、本稿では同じものとして扱う。明らかなのは、主語要素が /i/ 「私が」のように短く不安定な音形に感じられるとき、語形を支えるために /da/ を挿入することが多いということである。/da/ の挿入は意味の違いよりも、音形上の動機が大きいように思われる。

- (39) kerro getim-u. inta naʔajse **bula i da**
 door.NO be closed.DESC-Q I come.PTC.IMPFV open I exist.PFV
bule.
 open.IMPFV
 “Is the door closed? OK, I’ll come to open it.”

3.8.2 kumma ki (da) kummo

/kumma ki kummo/ は話者の意思が強く込められた動詞形態である。例 (40) のように演繹 (deductive) あるいは義務 (obligative) を表すほか、例 (41) のように未来の出来事についての約束 (future、commissive) をも表しうる。

- (40) isa q'a:bi kala gojti q'ole, komma inta ta:ki **jaʔa i da**
 my thought one way nothing and I now go.PFV I exist.PFV
joʔo.
 go.PURP
 “I don’t have any choice, so I must go now.”
- (41) inta **naʔa i da noʔo**.
 I come.PFV I exist.PFV come.PURP
 “I will come.”

また、上記の例 (40) のように、主語要素の後に /da:/ 「ある、いる」の接語形 /da/ が挿入される場合もある。第 3.8.1 節と同様、主語要素が /i/ 「私が」のときは /da/ を挿入するのが一般的である。

3.8.3 kummo ki kumme

/kummo ki kumme/ は、現在までのところ義務 (obligative) を表す用例が認められる。

- (42) wosi lama wul sa: **joʔo ki jeʔe.**
we two all there go.PURP he go.IMPFV
“Both you and I must go there.”

3.9 否定動名詞形

3.9.1 kummee

/kummee/ は、おそらく動名詞形 /kumme/ 「～している人」に否定接尾辞 /-e/ が付着したものであり、「～しない (人・物)、～していない (人・物)、～できない (人・物)」などの意味が認められる。この形自体は特定のモダリティを表さない。

- (43) kisi injera **isee.**
he injera eat.GRD.NOT
“He never eats injera.”

3.9.2 kummajje

/kummajje/ は、おそらく動名詞形 /kummaa/ 「～した人」に否定接尾辞 /-e/ が付着したものであり¹⁷、「～しなかった (人・物)、～しない (人・物)」の意味が認められる。この形自体は特定のモダリティを表さない。

- (44) kisi injera **isajje.**
he injera eat.GRD.A.NOT
“He never eats injera.”
- (45) inta q’ansarti ne har=na ha:midi hanna kinin
I listen.NOT.PAST COP what=to say.DESC.exist.DESC to you he.SUBJ
q’a:bono gijajno ina **ardajje.**
thought.NO tell.GRD.NO to me come into.GRD.A.NOT
“I didn’t understand because his explanation was not clear (*lit.* his thought didn’t come into me).”

¹⁷本稿とは反対に、Lydall (1976: 418) は /kummai-/ という語幹を /kumme/ に結びつけている。

3.10 te 複合動詞

3.10.1 kummata

/kummata/ は、おそらく否定の繫辞 /te/ が接辞化して語幹に付着したものである¹⁸。現在までのところ、アスペクト・モダリティは明確ではない。

- (46) ja na:na kira=ɗan kinka kidar fiaja=na
 you boy.NA these=ACC together on him do.INF=to
damata ne, har=na ha:midi hanna kisi
 be able to.PFV.NOT.PFV COP what=to say.DESC.exist.DESC to you he
 kiɗan tahe.
 him.ACC resemble.IMPFV
 “You shouldn’t compare these boys because they are not the same.”

3.10.2 kummati

/kummati/ は現在の否定形として一般的に用いられる¹⁹。例 (48) のように可能 (abilitive)、例 (49) のように願望 (desiderative) を含意することも少なくない。

- (47) inta gojti aga **desati** ne.
 I way this know.NOT.DESC COP
 “I don’t know about it.”
- (48) inta jera sija kote **ardati** ne.
 I thing bad here come into.DEG.DESC COP
 “I can’t deal with this problem now.”
- (49) kisi injera **isati** ne.
 he injera eat.NOT.DESC COP
 “He doesn’t want to eat injera.”

3.10.3 kummato

/kummato/ は可能 (abilitive) の否定を表し、しばしば「一般的に不可能であること (habitual)」にも用いられる。

- (50) po:lonin ro:ro da: wosi fi aj **a:pato** ne.
 cloud.if day exist.PFV we sun see.NOT.PURP COP
 “On cloudy days we don’t see the sun.”

¹⁸Lydall (1976: 419-420) は不規則な否定関係詞形としている。しかし現在までの調査では、この形はどの動詞からも規則的に作ることができると思われる。

¹⁹過去の否定には /kummati/ が用いられる。

3.11 te 複合動詞、主語要素、da:de の複合体

3.11.1 kummati ki da:de

/kummati ki da:de/ における /kummati/ は、Lydall (1976: 23) にしたがえば、第 3.10.2 節で述べた te 複合動詞ではなく、接語 /t/ 「～所に、～の中に」が接尾辞化したものである。確かに、この動詞形態は例 (51) のように「もうすぐ～が完了する」、例 (52) のように「～している最中である」と、ある出来事における開始・最中・終了の状態をある程度の幅をもって表すことが多い。このアスペクト的意味は、/da:/ 「ある、いる」に自身の接尾辞化形である /-de/ を付着させた /da:de/ を用いることで、いっそう強化されている。

- (51) galano **jeskati** ko da:de.
food.NO arrive.in.DESC she exist.PFV.exist.IMPFV
“Dinner is almost ready.”

- (52) wosi worren=t utan=na zagidi ne, kokkal
we wilderness=in go out.INF.N=to want.DESC.exist.DESC COP although
dommo **gato** ko da:de.
rain-NO beat.in.PURP she exist.PFV.exist.IMPFV
“We went out although it was raining.”

ただし、この動詞形態のモダリティは明確でない。

3.12 不定詞形、na 接語、主語要素、da:de の複合体

3.12.1 kummenna ki da:de, kumannna ki da:de

/kummenna ki da:de/ は、動詞の不定詞形に接語 /na/ 「～に、～のために」が後続し、さらに /da:de/ との複合体を形成することによって、出来事が始まる様子を表す。モダリティは明確でない。

- (53) kosi **kelšen=na** i da:de.
she help.INF.N=to I exist.PFV.exist.IMPFV
“I began helping.”

また、次に挙げるように自動詞化語幹を持つ /kummima/ を用いる例もある²⁰。語幹形成母音の /e/ と /a/ の違いが、意味的差異を生むものであるかは明確でない。

- (54) kosi **bakman=na** ko da:de
she cook.INTRANS.INF.N=to she exist.PFV.exist.IMPFV

²⁰自動詞化を担う接尾辞 /-m/ については高橋 (2013: 41-43) を参照。このとき、3 子音連続を避けるため /i/ が挿入されることもある。

“She began cooking.”

3.13 禁止を表す動詞形態

3.13.1 kumma bode

/kumma bode/ は一般的・恒久的な禁止を表す。モダリティとしては命令 (imperative)、義務 (obligative)、習慣 (habitual) に分類される。

- (55) kombet dāḷq’an=na **zaga** **bode**.
her.with speak.INF.N=to want-PFV DONOT
“You mustn’t (or don’t have to, or Don’t) talk with her.”

3.13.2 kumman gara, kumman gare

不定詞形と /gara/ 「捨てる、放置する」との複合形は一時的な禁止や制止を表す。第 3.2.2 節と同様、複数への命令には /gare/ を使う。モダリティとしては命令 (imperative)、義務 (obligative) に分類される。

- (56) kodan **dattan** **gara**.
her.ACC speak to.INF leave.PFV
“Don’t talk with her.”
- (57) wo **jeʔan** **gare** sa: ogote.
we go.INF leave.IMPFV there there
“Let’s not go there.”

4 終わりに

本稿は、ハマル語におけるモダリティ研究のためのパイロット・スタディとして、動詞形態 27 個についてモダリティの観点から整理した。今回は語用論との境界も曖昧であり、非常に大雑把な分類となったのは否めない。しかし、ハマル語の動詞体系がモダリティ、およびアスペクトと大きな関係を持つことを再確認し、意味項目を整理するための第一歩となった。今後、この枠組みを修正・拡張しつつ、オモ諸語をはじめとする様々なエチオピア諸言語の通言語的な動詞分析のための基礎づくりを進めていきたい。

【参考文献】

- Callahan, S. N. (2010) *Modality and the Biblical Hebrew Infinitive Absolute*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Lydall, J. (1976) “Hamar” In M. L. Bender (ed.) *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*. Michigan: Michigan State University. 393-438.

Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*. 2nd Edition, Cambridge: Cambridge University Press.

高橋洋成 (2009) 「ハマル語の基礎語彙、ならびに動詞形態の考察」 乾秀行 (編) 『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (*Cushitic-Omotc Studies 2008*)』 107-138.

高橋洋成 (2010) 「ハマル語の代名詞と後接語体系」 乾秀行 (編) 『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (*Cushitic-Omotc Studies 2009*)』 131-164.

高橋洋成 (2011) 「ハマル語の文例集、および文型の分類」 乾秀行 (編) 『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (*Cushitic-Omotc Studies 2010*)』 111-137.

高橋洋成 (2012) 「ハマル語の数量・程度表現についての覚え書き」 *Studies in Ethiopian Languages*. Vol. 1, 282-291.

高橋洋成 (2013) 「ハマル語の受動表現・使役表現に関する覚え書き」 *Studies in Ethiopian Languages*. Vol. 2, 39-48.

	Spec. ^a	Ass.	Ded.	Evi.	Neg.	Int.	Fut.	Con.	Hab.
kumma									
kumme									
ki kumma									
ki kumme							+		+
ki da kumme									+
kummida									
kummidi							+		
ki kummade									
kumma kumma							+		
kumma kummo									
kumma da kumma									
kummo da kumme							+		
kummi di kumme							+		
kumma ki kumme							+		+
kumma ki kummo			+				+		
kummo ki kumme									
kummee									
kummajje									
kummata									
kummati									
kummato									+
kummati ki da:de									
kummenna ki da:de									
kummimanna ki da:de									
kumma bode									+
kumman gara									
kumman gare									

^a 略号は次の通り。 Spec.=Speculative, Ass.=Assumptive, Ded.=Deductive, Evi.=Evidential, Neg.=Negative, Int.=Interrogative, Fut.=Future, Con.=Conditional, Hab.=Habitual, Per.=Permissive, Obl.=Obligative, Imp.=Imperative, Jus.=Jussive, Com.=Commissive, Abi.=Abilitive, Vol.=Volitive, Des.=Desiderative, Pur.=Purposive, Res.=Resultative

表 1: Propositional Modality

	Per.	Obl.	Imp.	Jus.	Com.	Abi.	Vol.	Des.	Pur.	Res.
kumma		+	+	+						
kumme		+	+	+						
ki kumma										
ki kumme				+	+	+		+	+	
ki da kumme										
kummida										
kummidi										+
ki kummade										
kumma kumma			+			+	+			
kumma kummo			+			+	+			
kumma da kumma										
kummo da kumme						+	+			
kummi di kumme	+	+								
kumma ki kumme		+				+	+	+		
kumma ki kummo					+		+			
kummo ki kumme		+								
kummee										
kummajje										
kummata										
kummati						+		+		
kummato						+	+			
kummati ki da:de										
kummenna ki da:de										
kummimanna ki da:de										
kumma bode		+	+							
kumman gara		+	+							
kumman gare		+	+							

表 2: Event Modality